

電波政策 2020 懇談会サービスワーキンググループ
ワイヤレスビジネスタスクフォース(第6回)議事概要

1 日時

平成 28 年4月 14 日(木) 9:00~11:00

2 場所

総務省 第1特別会議室(中央合同庁舎第2号館8階)

3 出席者(敬称略)

構成員:

安藤康浩(株式会社東芝 社会インフラシステム社海外事業推進室 地域統括部担当部長)、飯塚留美(マルチメディア振興センター電波利用調査部 研究主幹)、大橋正良(福岡大学工学部電子情報工学科 教授)、小瀬木滋(海上・港湾・航空技術研究所電子航法研究所 研究統括監)、國領二郎(慶應義塾大学総合政策学部 教授)、川西哲也(早稲田大学理工学術院基幹理工学部 教授)、國領二郎(慶應義塾大学総合政策学部 教授)、坂本守(株式会社日立製作所 情報・通信システム社 社会システム事業部 テレコムソリューション本部 本部主管)、竹内 博史(国際協力機構 社会基盤・平和構築部 課長)、土井美和子(情報通信研究機構 監事)

総務省:

輿水総務大臣政務官、福岡総合通信基盤局長、渡辺電波部長、田原電波政策課長、庄司電波政策課企画官、新田国際周波数政策室長、寺沢基幹通信課長、小川移動通信課企画官、内藤衛星移動通信課長、中澤監視管理室長、武馬衛星移動通信課課長補佐

4 議事要旨

(1)開会

(2)資料に基づき、構成員、有識者及び事務局から説明が行われた。

(3)質疑応答・意見交換等

- 海外展開戦略で、オリンピック・パラリンピックを具体的な目標とし、オリンピックを支える日本の IoT、ICT 技術というところを PR する機会が重要。
- 今既にあるマーケットにある参入障壁をどう超えていくか、日本の技術をどう出していくかという施策は、例えばナショナルプロジェクトであるという整理が良い。それ以外の施策で、これから世界でマーケットを作ろうという分野は研究開発の施策が利いてくる。
- 技術のフェーズによって政策を整備していくという考え方は非常に効率が良い。その中でリニアセル・セ

ンサーネットワークに関しては、既に海外の競合が導入を始めているが、完全には商売になっていない。そういう視点も踏まえて整理し、それぞれに手段があれば分かりやすい。

- 海外のシステム、空港や防災のネットワークは、海外の企業がインテグレーターとして入っている。日本の場合は、インテグレーターの役割を国のような公共がやっているというのが特徴。国内でそれが出来る企業、組織がある分野を中心としてナショナルプロジェクトのようなものを作れないか。
- インテグレーターが日本で難しいという点で、タイでリニアセルセンサーネットワークを実証実験した際に、日本企業が全面に出るとというのが意思決定の問題で困難との課題があった。
- インテグレーターの担い手として、フランスなどは半官半民的な要素がある。アメリカでも、フットワークが軽い大学の先生が事実上国の政策に近いことをやっているし、タイでも、リニアセルセンサーネットワークの実証試験の際にチュラロンコン大学の先生がタイ国家放送通信委員会(NBTC)と動いていた。
- 衛星では、人材育成と技術導入をパッケージにとの相談も非常に多い。人材の面では、かつて日本に留学経験があり、帰国後に現地でキープレーヤーになる人もいる。
- これから海上や空も、陸上と同じようにエリア化をしていく、加えてブロードバンド化していくところがポイント。また、航空宇宙ビジネスは、今、非常に競争が激しい分野。衛星分野などは、超小型衛星から既存の大型衛星まで、さまざまなプレイヤーが登場しており、価格破壊が生じるのではないか。その価格破壊が起きたときに市場が取れないと非常に困るので、特に重点分野については、スピード感を持ち早く施策を打つと同時に、技術開発、制度整備、現地ではどのようなビジネスモデルがあるのかということも併せて考えて手を打っておく必要がある。
- 目標を2020年とするかどうかに関して、ワイヤレスビジネスを今後立ち上げるには、継続的な発展を可能とするフレームワーク及び施策が必要で、中長期的との記述も重要。
- 衛星、宇宙分野はベンチャーが台頭しつつあり、新しい産業として育成しようという動きが海外でも強い。その一方で、衛星が使う周波数帯と、モバイルの検討周波数帯がバッティングする事態がある。米国では5Gの周波数帯の検討にあたり、衛星ベンチャーによる市場発展を阻害しないような政策を検討中。
- 電波は希少資源なので、割当を考えると2020年より先まで考える必要がある。そのイメージを作るためにも将来の見通が必要で、それぞれのアプリケーションでどれぐらい需要が出てくるか、その辺りのユーザーサイドの観点から考えて、どんな電波利用のある社会ができるのか、絵を描いていくことが重要。
- どうやって世界の主導権を取っていくか、そのために標準化で世界をリードできれば非常に有利になるが、一方、単価の安い市場では、あえて標準化はしない方が良い分野もあり、その戦略の整理が必要。

○ ベンチャーでは、標準化は非常に重要。海外で使ってもらうときに、グローバルなルールに乗っているかどうか非常に重要になる。ベンチャーが ITU のルール作りに深くコミットする際に、WRC のプロセスは非常に長い大変な労力が必要なので、支援をいただけるような体制が必要。

○ ベンチャーはゼロから技術を作るのは難しいが、すでにある技術であれば小回りの利くベンチャーのほうが安くできるかもしれない。無線関係チップは、標準化されたからこそロット数が上がり、コストが安くなった側面もあるのでケースバイケースとも考えられる。

(4)その他として、事務局から、次回会合の日程・場所等について説明。

(5)閉会